

京鹿子

京都府立総合資料館
京鹿子
第10号

10月号

鈴鹿 呂仁
拾掬集 その七十三

手湿りの秋暑のページたたむ夜半
列島の残暑の鎖ほどけない
赤とんぼ逸れて街の声拾ふ
新参と思しき構へ茄子の馬
方寸の一遊一予みのむし鳴く
層巒の一つの翳り初しぐれ
野放図も正統ぶるも鶏頭花



ランウェイライト九月の雨は甘えん坊
商^{あきんど}人の手の内隠す秋扇

吟行嵯峨野

解けゆく風の結び目嵯峨晩夏
秋蚊ゆゑ祇王の腕と覚えしか
葬る地の千の翳縫ふ秋の蝶
青柿や世捨人には成り切れず
吹き寄せる竹林の黙あきのこゑ

塩貝 朱千



須磨琴

佛門に生くは難しと寺大蟻
須磨琴の裏は丹塗りや花カンナ
爽秋の白馬とならむ波がしら
二礼二拍手白き萩より揺れはじむ
風の萩衣ずれに似てひとりの午後

英華採集

蚊のこゑを叩きて辞書を繰り直す 鎌倉 畑 佳与
マンシヨン暮らしの一定の高さともなると蚊も入って来れないと思うが、人の衣服に着きエレベーターに乗れば部屋への侵入も可能になる。蚊にとつてはマンシヨンのセキユリテイーは脆弱である。掲句の作者は、作句に夢中になり難しい言葉に一心不乱に辞書と格闘している最中蚊の羽音を耳にしているものの、本来であれば居場所を突き止めてスッキリしたいところを何かの締め切りに追われているのである。「蚊のこゑを叩きて」の措辞に蚊にかまっておれない必死さが伝わる。

ひらがなで遊ぶ尺取り虫の性 福山 奥中 双樹
もしも可能であれば尺取虫に直接聞いてみたいことがある。「貴方は何故あのように真面目に尺を計るかの様に歩いている」のかと。「いやあ、私にも分からないのです。悲しい性ですかねー」との答えが返ってくるだろう。作者は尺取虫の歩様を「ひらがなで遊んでいる」と捉えた。尺取虫はひらがなしか書けないのだ。漢字を書けば足が絡まるだろう。拙句に「釈明に追はる尺蠖ひらがなに」があるが、この句を下敷きにしているのであれば嬉しい限りである。

半夏雨昨夜のものなど煮返して 朝倉 小池 かつえ
半夏とは、夏至の日から数えて十一日目の陽暦七月二日頃に当たり、仏教で行う九十日間の夏安吾の中間を指す。半夏に雨が降ると大雨になると言われ各地に被害が出たり、半夏（からすびしゃく）という毒草が生えるとも言われる。掲句は、梅雨の頃でもあり、色々物も傷みやすい時期とあっての「煮返す」という主婦の知恵であろう。「半夏雨」という季語を巧みに使い響き合わせている。

案山子 沼田巴字

岩に彫りし地藏三尊竹の春
寺近く念仏を聴く案山子かな
山峡や案山子は孤独守りきる
桜紅葉人は孤りで生きられず
軽やかに散る定めかな楡落葉

月天心 植村蘇星

日傘とち遊び心を閉ぢにけり
いろはには病葉落ちる音を詠む
月天心句会三昧賑々し
と見かう見先づは一言雲は秋
加齢てふ脳味噌萎む残暑かな

梅雨の果て 北川孝子

たまゆらの灯のほつほつと梅雨の果て
おもしろの世をさわがせて送り火消ゆ
誰かれのやさしさに生き雲の峰
無心とはかくも奔放タワー灼く
省略の過ぎたる暮し水を打つ

カンナ 直江裕子

しばし抱く素足の手ざはりいとしめる
還らぬ日閉ぢても見ゆる終戦日
暑い暑いさなかの自粛いのちうごめく
石くれに耳傾けるカンナまつ赤
さたうきび畑に夕日照るばかり

西暦 高木晶子

西暦のどこかに生きて半夏生
カタカナを現在形に夏の浜
ゼリー菓子そろそろ現世に戻る
疑はず飲む山の水夏来る
桧扇を活けて京都市一番地

発汗 奥田筆子

発汗すチキータYG個観戦
若夏や階段手摺から金メダル
雌伏期や棋界球界変異株
生きるヒント六才に与け文月かな
一灯に夜間散歩の海月かな

巨船座す 伊藤希眸

蹀へ波来る背は熱暑招ぶ
沖風の夕涼湾へ巨船座す
海原の涼しドレスの舞ふ甲板
蹀の焦げくさきまで砂浜は灼け
万緑を早足で来る日章旗

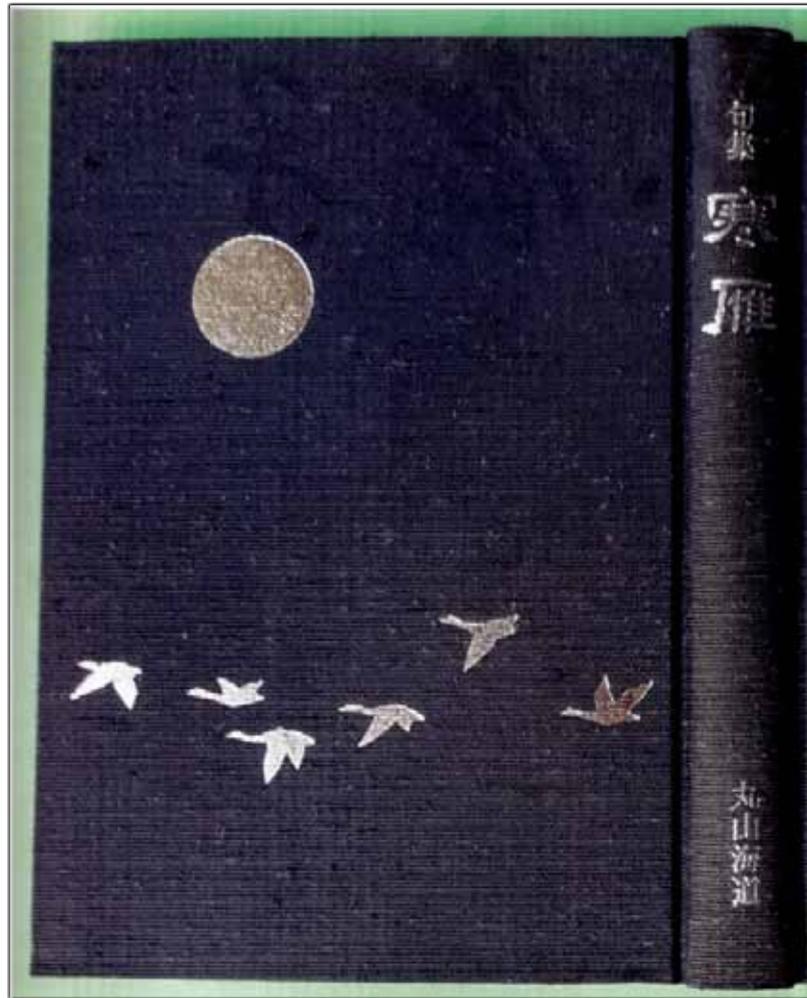
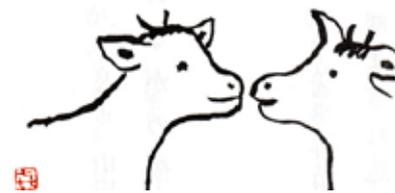
秋の暮 井上菜摘子

兄からは帯のわたくし秋晴るる
朝露の微光つかのまを望みもつ
時間が足りない秋風の扉を閉める
烏瓜とつぷり昏れて百箇日
みほとけの笑みななめより秋の暮

神麓集

花野 村田あを衣

雲と風遊びあそばせ花野かな
未来図へこの大花野画き足しぬ
花芒まだ知らざりし風の裏
やがてひとり花野の道の果てなるは
秋蝶のいつしか影は保身なる



丸山海道 第七句集



京鹿子集

豊田都峰選

水中花灯し昭和の理髪店

京田 山中志津子

薔薇活けてまだ一波瀾ある余生

思考回路の真つ赤サルビアの昼
秒読みの緋衣草の発火点

城陽 鷺山 珀眉

雨受けて泰山木は磁器の花

結界の木霊返しや青葉木菟

紫陽花の午後を切り取り序章とす

学僧の一礼深し風青し
水無月の風梳く絶え間なき水音

雲の峯映し火口湖永久の黙

京都 井尻 妙子

七曜を確かむ生活髪洗ふ

福山 亀井 福恵

知らんぷりされ紫陽花の青を剪る

プレゼンのはじめサルビアのブルー

いささかの欲抱きをり木下闇
正鵠を得しひと言や生身魂

向日葵へおとぎ列車の発車音

流星の長きは闇の静ごころ

バイヤーの手囲ひの中甲虫

梅花藻のゆれて戸ごとに水汲場

幼らの甲虫操るカタン糸

角隠し生涯脱げぬ兜虫

福知山 西村 白籽

向日葵の中まで青い空なりき

影つれて今日も緑の端にゐる

ポンと叩き発火しさうな西瓜かな

この自由うれし嬉しと蟬しぐれ

青田風そろばん塾の底力

京都 菊池 和子

比叡よりの水は饒舌夏来たる

念仏は心の出水夏椿

むらさきの空がひつばる胡瓜の蔓

川風の風が連れ去る汗の玉

間引菜を洗ふ朝日の柔らかき

みみず鳴く窓に真昼の闇匂ふ

戦はノーわたしかぼちゃで生きてゆく

噴水の水の妖精天に舞ふ

子蟻螂の細うで未だ影もてず

望郷のライオンの見る夏の夢

青梅雨の葉がくれの墓寂一字

日曜日園の垣根の時計草

青水無月螺鈿の古ぶ母の宮

縞馬とおそろひのシャツ夏は来ぬ

子の両手合はすふくらみ初蛭

福山 石原 孝人

若き日を拾ひ読みする曝書かな

万緑の底の静けさ水のご糸

海開きパレットに溶く青絵具

腕白の秘密の基地や兜虫

蚊のこゑを叩きて辞書を繰り直す

鎌倉 畑 佳与

八十代の未来ふらふら梅雨ふらふら

ママさんと我を呼ぶ夫梅雨さ中

はたと齡見ゆる日のあり梅雨に入る

ひらがなで遊ぶ尺取り虫の性

沙羅の花落ちて百花の一つ減り

古池の暮れて呼び合ふ牛蛙

癒ゆことの日毎数へる野萱草

半夏雨昨夜のものなど煮返して

朝倉 小池かつえ

胸突坂老鷺の声ころがり来

梅雨明けや糸底の洩念入りに

マリオネットの手足こきき梅雨の果て

